昭和27年５月28日第三種郵便物認可　毎月１回１日発行
令和５年１月25日印刷　令和５年２月１日発行　第72巻第２号　通巻第846号

不二

中　高　版

2
2023

令和四年度第３回昇格・昇段試験成績発表
第72回 全日本学生書道展成績発表

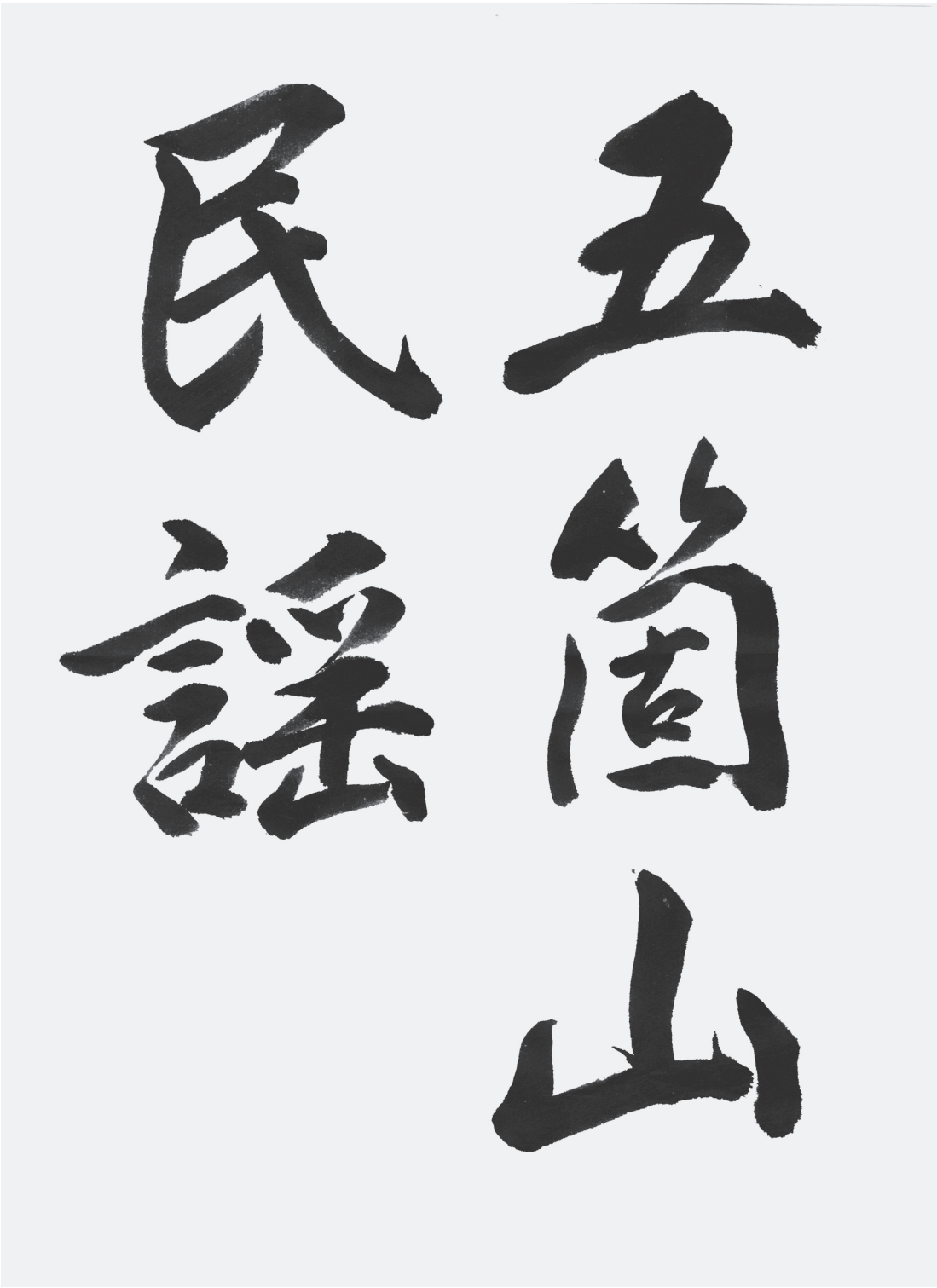
公益財団法人 日本書道教育学会

不二　中高版　2023　2月号　公益財団法人　日本書道教育学会

漢字半紙（誌友～五段）

課題は段級別です。ご注意ください。

五箇山民謡（ごかやまみんよう）



署名では姓名を記す

（解説は19ページ）

小久保嶺石先生書

漢字半紙（四段〜初段）

課題は段級別です。ご注意ください。

大伴家持（おおとものやかもち）

署名では姓名を記す

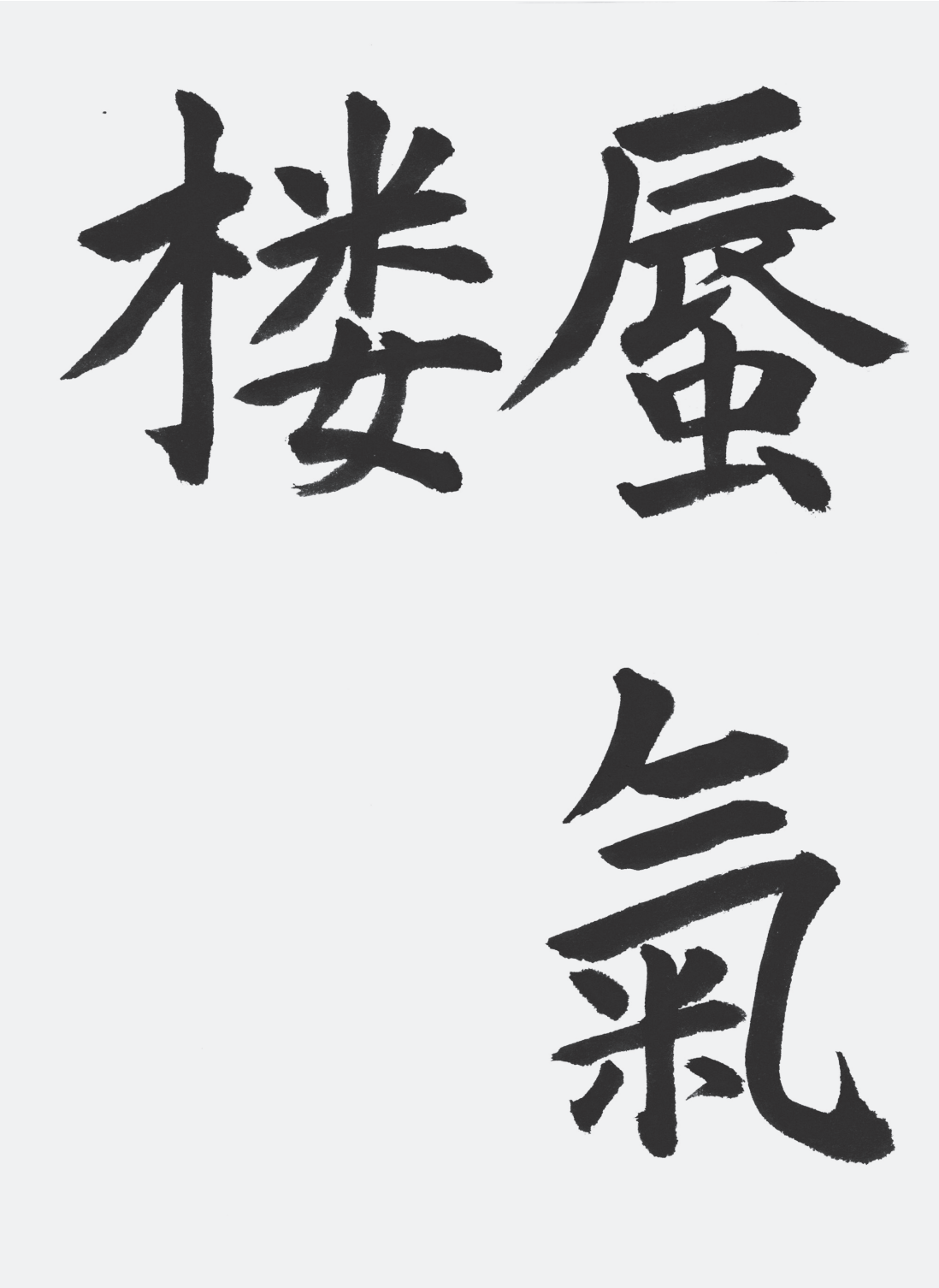
（解説は19ページ）

小久保嶺石先生書

漢字半紙（1級〜10級）

課題は段級別です。ご注意ください。

蜃氣楼（しんきろう）



署名では姓名を記す

（解説は19ページ）

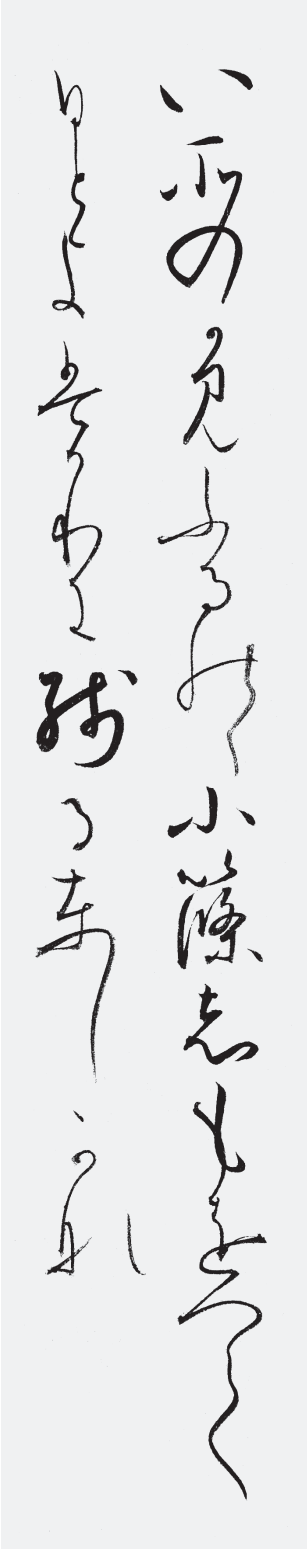
小久保嶺石先生書

かな半紙（誌友～五段）

課題は段級別です。ご注意ください。

秀歌之體大略

〈筆者〉近衛家熙（一六六七～一七三六・江戸中期の能書家・号は予楽院）



石上布留野の小笹霜を経てひと夜ばかりに残る年かな

『新古今和歌集　巻第六　冬歌698　摂政太政大臣（藤原良経）』

（解説は20ページ）

短冊について

鎌倉末期頃より和歌をしたためる書式として広まりました。横約6㎝、縦約36・5㎝の大きさで全懐紙をたてに八等分した大きさです。短冊には上下があり、雲・霞形は広いほうが、濃淡は濃いほうが、着色が異なる場合には色の濃いほうが上といったもので、練習用紙ならば、糊付けされている方が上になります。

書式

伝統的な書式

○短冊の上部を1／3または1／4空け、歌を書き始める。

○墨継ぎは和歌の場合、第一句・三句・五句で行う。

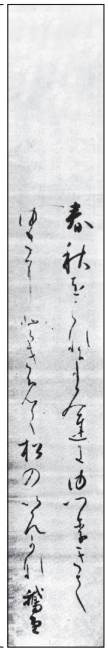
○下部が詰まり過ぎないよう、少し空けるとよいでしょう。

○行間や、字粒にも気をつけ、作品として調和するよう心がけましょう。また最近では、このような伝統的な書式にこだわらず、自由に書くこともあります。

○出品の際には、必ずバーコード出品券と月別出品券を表面左下に貼付けしてください。裏面には不二教室名、氏名を鉛筆書きしてください。

提出用紙―やや薄手の短冊練習用紙。二つ折にて郵送できるもの。

余白　上部をおよそ1／4（約9㎝）またはおよそ1／3（約12㎝）空ける



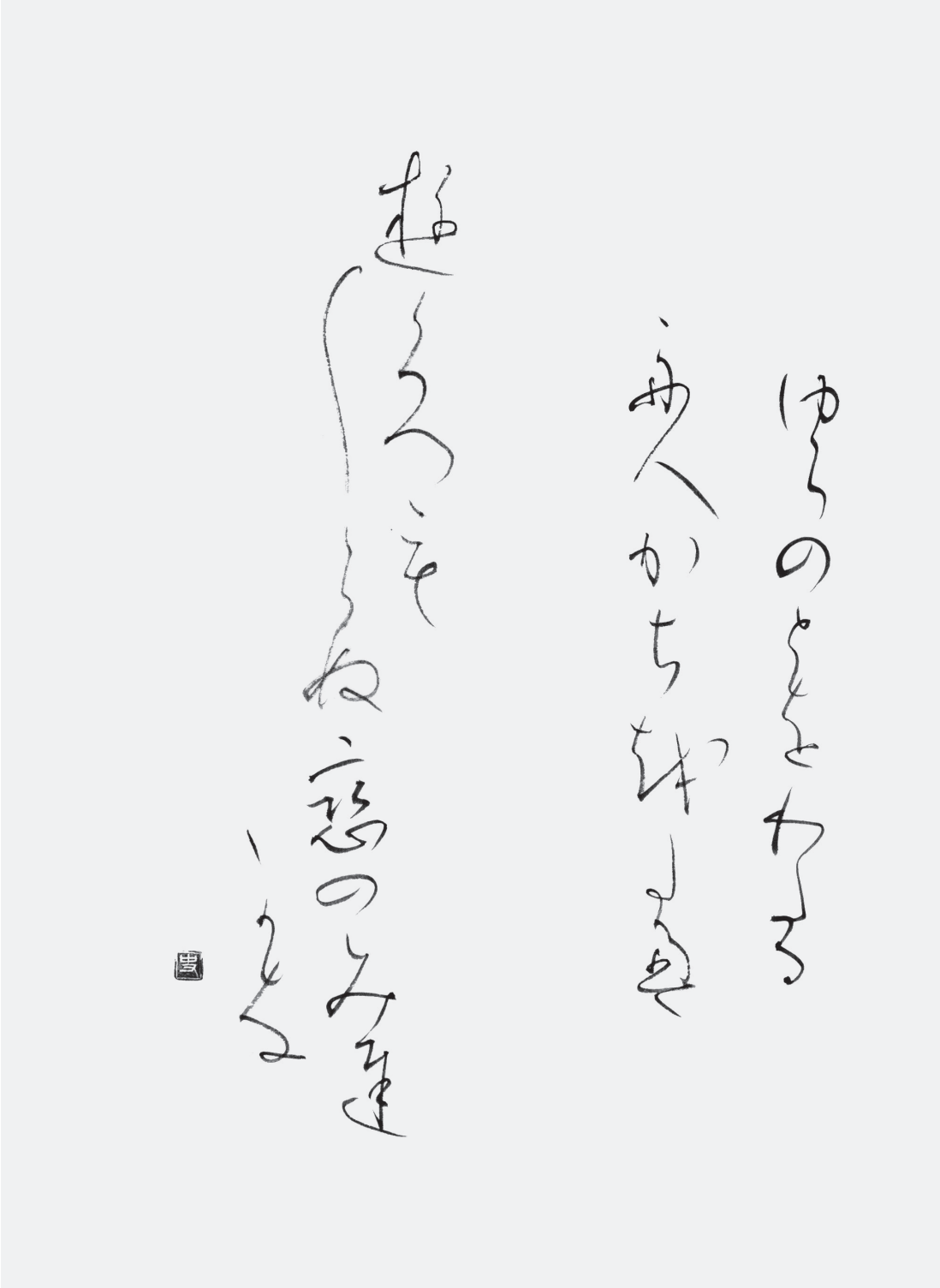
長さ　約36.5㎝

幅　約6㎝

かな半紙（四段～初段）

課題は段級別です。ご注意ください。

由良のとを わたる舟人 かぢをたえ ゆくへも知らぬ 恋の道かな（曾禰好忠）



川島史子先生書

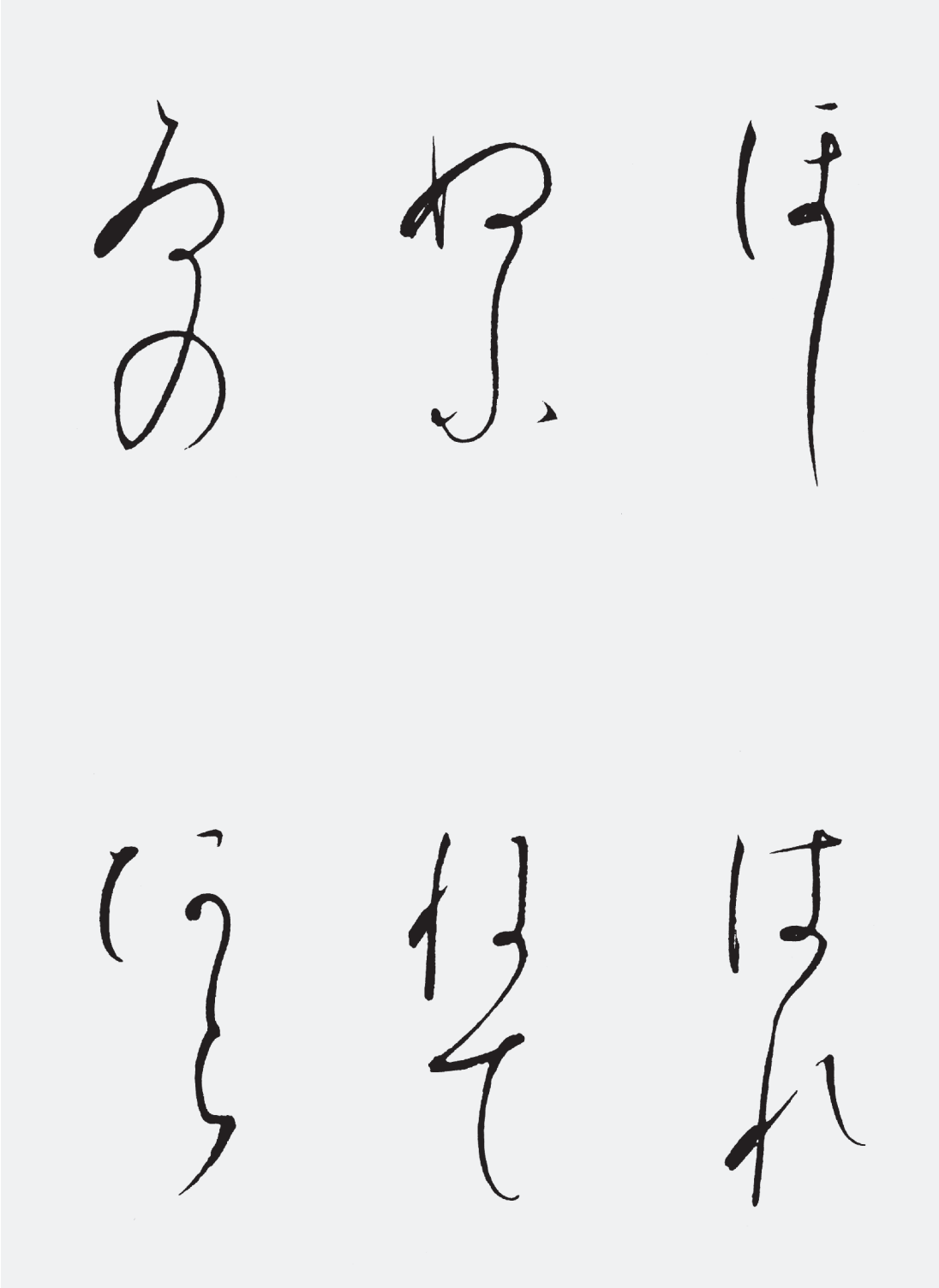
署名では姓名を記す

（解説は20ページ）

かな半紙（1級〜10級）

課題は段級別です。ご注意ください。

ほし　はれ　ぬふ　ねて　ゐの　阿(あ)ら



安東聖空書「梅雪かな帖」より

署名では姓名を記す

（解説は21ページ）

扁額の書をつくる（誌友～初段）課題は段級別です。ご注意ください。

（用紙　画仙紙半切½）　石橋鯉城先生書

課題　横額「三　省」

〈課題より〉

ここに明治四十四年一月三日の新聞があります。そこには『書店の初荷』と題して神田三省堂の初荷の模様が伝えられています。大久保利通公の神道碑（日下部鳴鶴筆）建碑のニュースと、東京の三大書店の一つ、三省堂とお正月の風景が報じられています。百十年以上も昔の正月三日に、文芸の話題が紙面を飾っていることに驚かされます。なお、すべての漢字にルビが振られているので、老若男女問わず、多くの国民がこの記事を読み得たのでしょう。明治期の文芸復興の気概とその恩恵に浴して、希望をもって活々と生活していたことが偲ばれます。

▲書店の初荷　三省堂にても百科辭書完成の祝ひを兼ねて廿餘臺の車を曳き出し車毎に馬鹿囃子を乗せ笛大鼓大旗小旗にて神田の町内を練歩き博文館でも例年の如く新刊書類を滿載して是も中中の景氣なり其他白シャツ赤洋袴と云ふ珍趣向で押出したるもあれば、付け髭鬘と云ふ風俗もあり二三人連れの荷車は東西に飛違ふ、例年に比してこそ不景氣なれ未だ〳〵東京名物の一つたるを失はず

〈落款解説〉

自分の名前

書

〈用具・用材〉

筆＝羊毫大筆
墨＝一味真
紙＝不二

※作品識別のため、作品下部に教室・氏名の鉛筆書きをしてください。

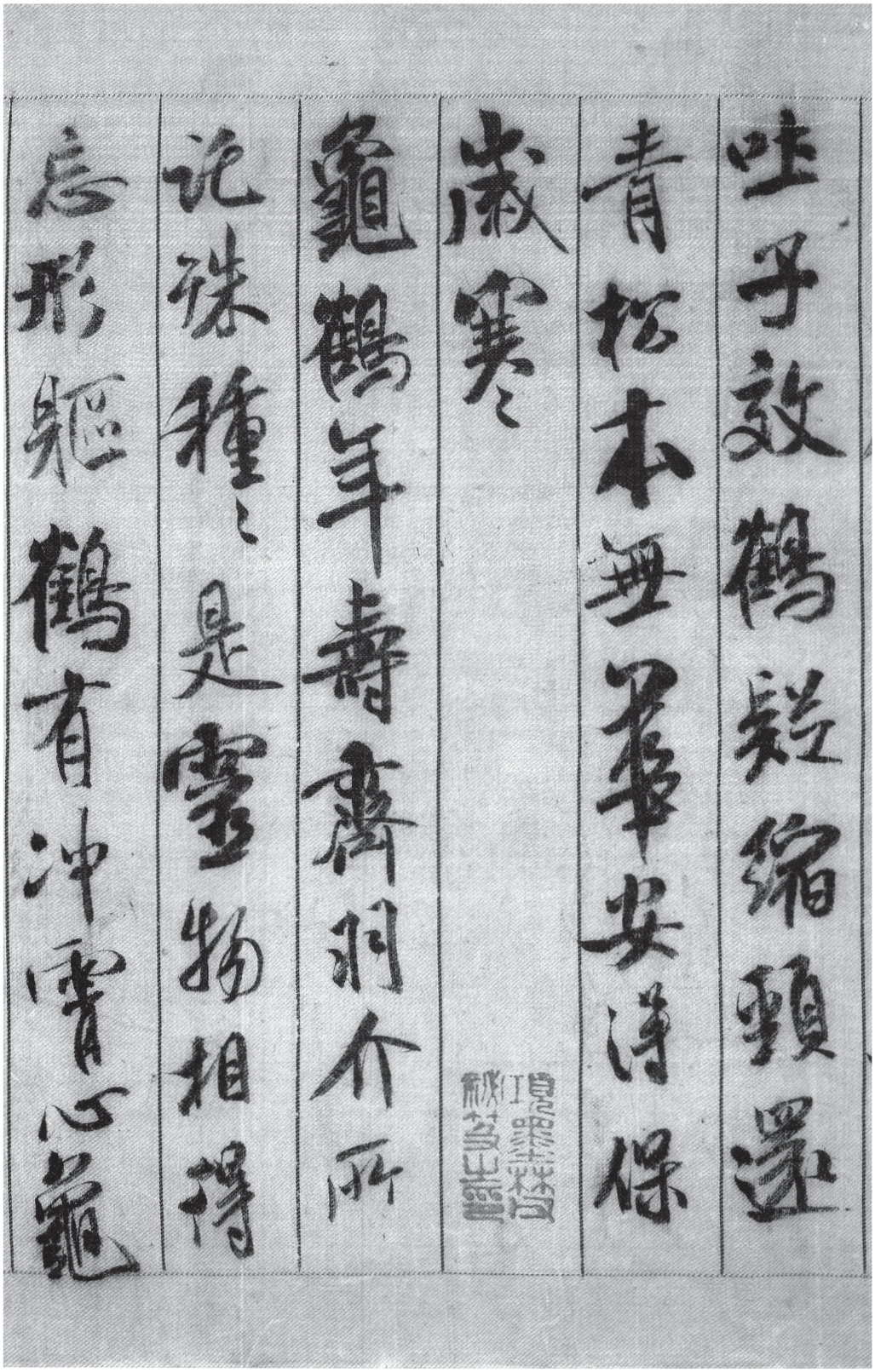
月別出品券とバーコード出品券の貼り方

落款	
Ⓐ	教室名 段 氏名 級
Ⓑ	Ⓐ月別出品券 Ⓑバーコード出品券

漢字条幅（1級〜10級）

課題は段級別です。ご注意ください。

左の『蜀素帖』の「青松本無華」を臨書しなさい。



（柏見）吐子效　鶴疑縮頸還　**青松本無華**　安得保歳寒　龜鶴年壽齊　羽介所託殊　種種是靈物。相得忘形軀　鶴有沖霄心　龜

青松本無華（青松、本と華無し）

〈大意〉青い松にはもともと花は咲かない。

蜀素帖（しょくそじょう）（北宋・一〇八八年）　米芾（一〇五一～一一〇七）

〈学び方〉

○まず原帖（左図版）を鑑賞する。そのあと、大字で書かれた参考手本から布置や変化のつけ方などを確認して臨書する。

○余白を含めた布置の取り方を学ぶ。

小久保嶺石先生臨

（用紙　画仙紙半折1/2・たて68㎝×よこ35㎝）

〈解説〉

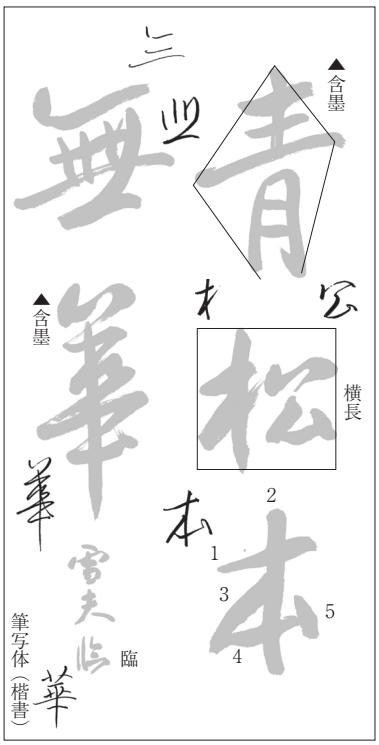
青…10月号で学んだ冒頭の「青松」より力の抜けた書きぶりとなっている。含墨するが、原帖に則ってやや細目に書き、次の「松」まで墨を残す。

松…冒頭の木偏は楷書に近い形で書いたが、ここでは行書の書き方。「公」は鋒を浮沈させながら筆脈をつなげて書く。

本…ここで軽く含墨してもよい。筆順に注意。

無…渇筆で表現してみよう。行書では、横を3本引いてから縦4本。縦の4本目につないで烈火を示す横画、の順に書く。

華…ソ・一の草冠。筆写体の華を書いている。指書をして形に慣れてから書こう。



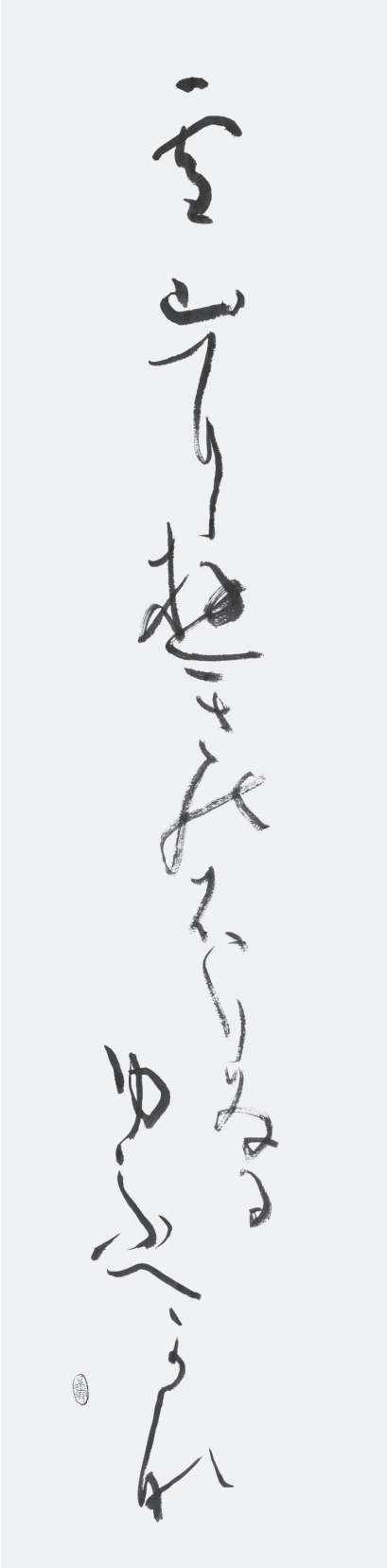
※○○臨と入れます。

〈用具・用材〉筆＝永昌条幅
墨＝和墨　紙＝中国画仙

※作品識別のため、作品下部に教室・氏名の鉛筆書きをしてください。

かな条幅（誌友～10級）

須山万寿先生書



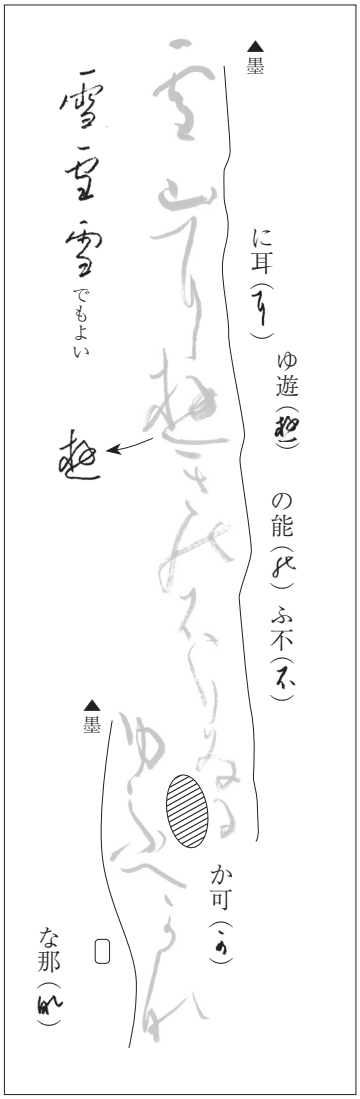
（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

雪山に雪の降り居る夕かな

〈読み〉雪山耳遊き能不りゐるゆふべ可那

〈出典〉前田普羅（一八八一～一九五四）

〈大意〉遠方に見える雪山に、夕方さらに雪が降ってきた。



〈解説〉

○連綿は「き」と「ゐ」だけで一字一字をきって書く「放ち書き」にしました。簡潔ですが間のとり方・気脈（筆の気持ちが続いていくこと・画と画とが見えない線でつながっていること）に注意しましょう。

○字に大小強弱もつけ、変化を出します。

○二行目は強い線で書くことを心掛けました。

〈用具・用材〉

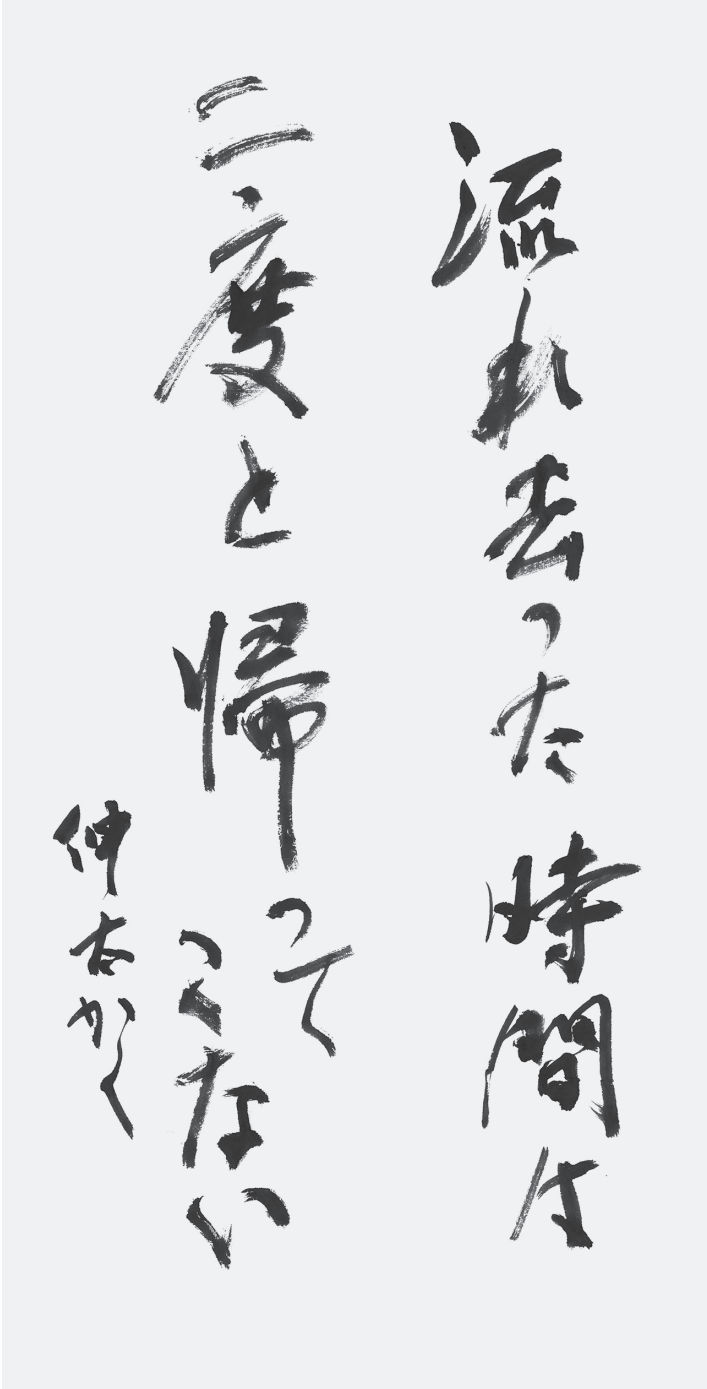
筆＝羊毛筆　墨＝和墨

紙＝かな用加工紙

※作品識別のため、作品下部に教室・氏名の鉛筆書きをしてください。

新和様

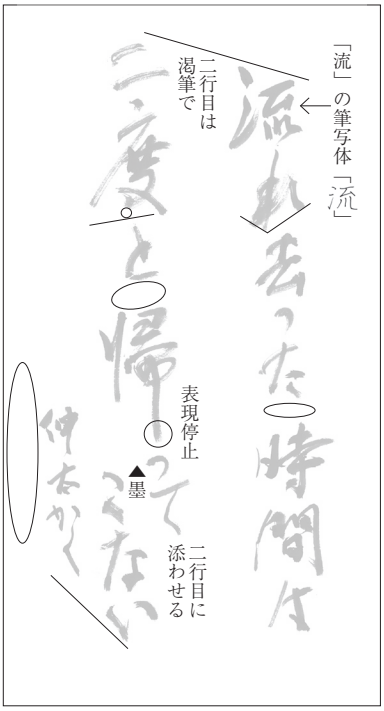
（八段～初段）課題は段級別です。ご注意ください。



永井香樹先生書

（用紙　画仙紙半切1/2・たて68cm×よこ35cm）

※作品識別のため、作品下部に教室・氏名の鉛筆書きをしてください。



流れ去った時間は
二度と帰ってこない

〈課題より〉

○ドラえもんがのび太に向けて「よく見ておくんだね。君が昼寝をしている間にも時間は流れ続けている、一秒も待ってくれない。そして」に続く。

〈解説〉

○前半はやや小さめに書き、後半は文字数が多いので二行で書いてみました。

○潤渇の響き合いに留意しましょう。

○用紙を前半と後半を一対二くらいの広さに書くと、まとめ易くなります。

○二行目は渇筆を活かして、漢字を大きめに書くと変化も生まれ、三行目で墨を入れて添わせましょう。

〈用具・用材〉

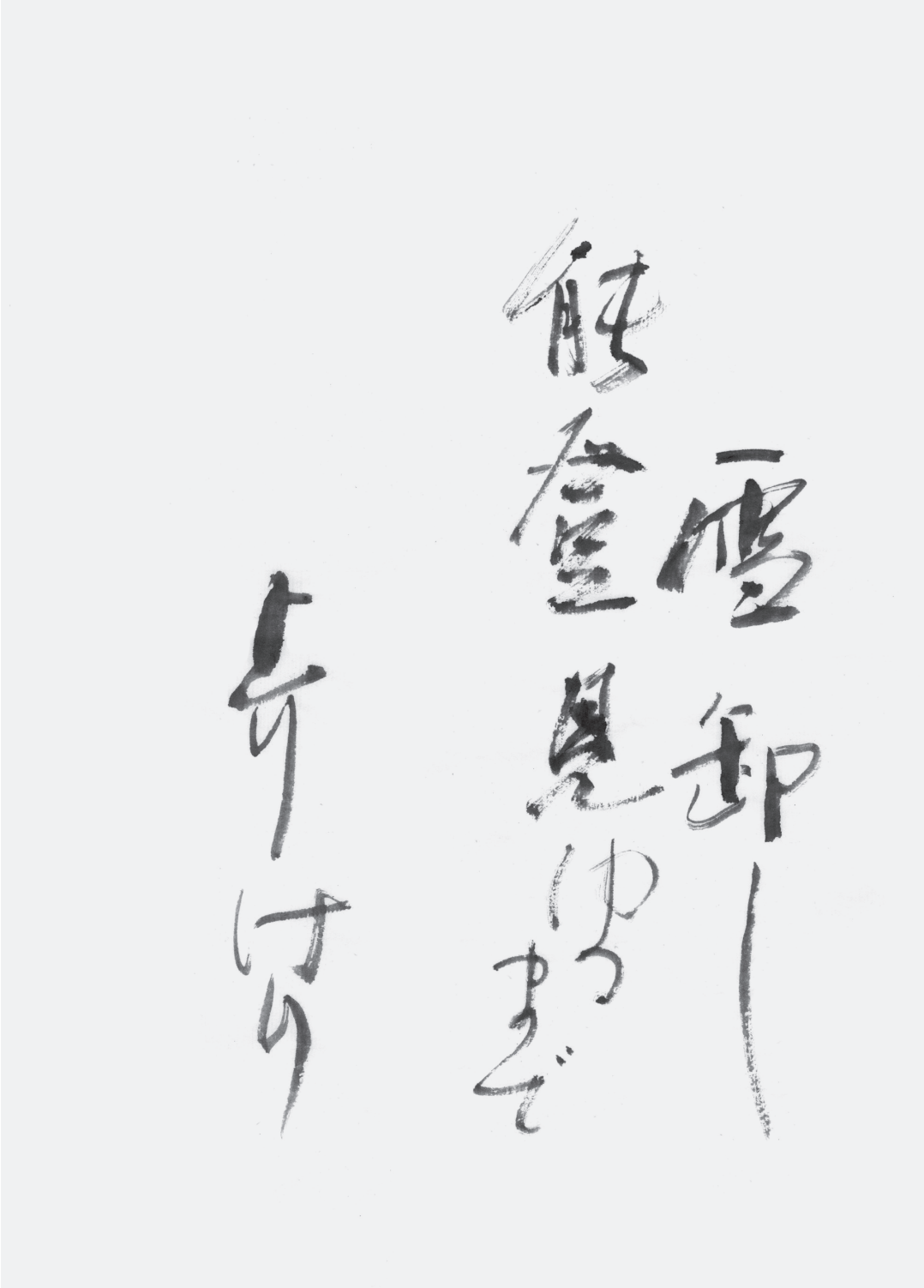
筆＝和筆四号羊毛

墨＝和墨　紙＝手漉和画仙

新　和　様（1級～10級）

課題は段級別です。ご注意ください。

雪卸し能登見ゆるまで上りけり



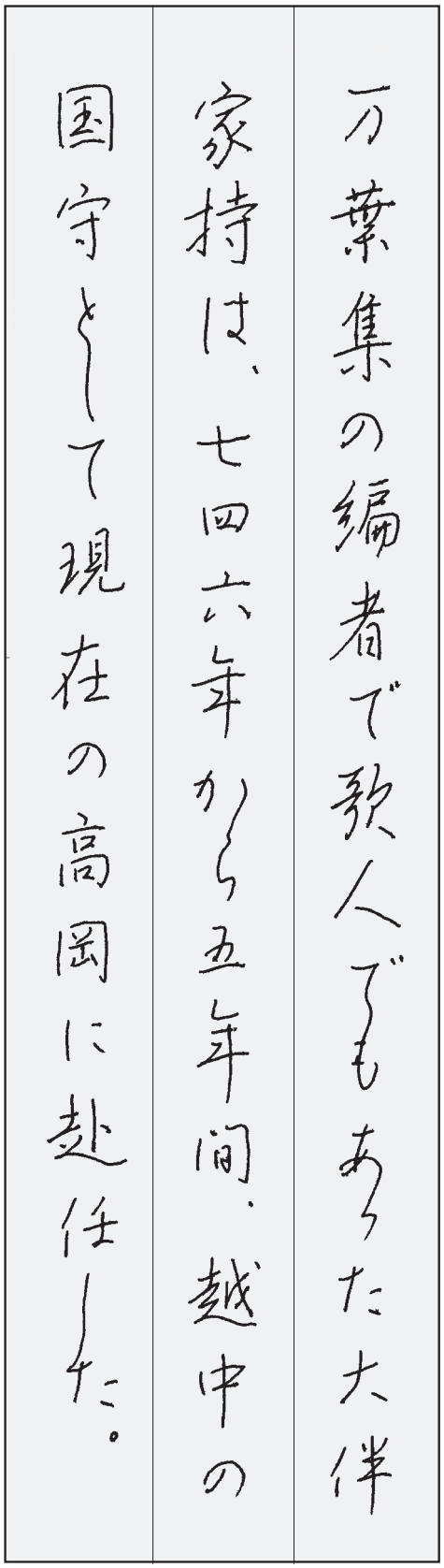
（用紙　半紙）

署名では姓名を記す

（解説は21ページ）

石橋鯉城先生書

ペン（八段～初段）課題は段級別です。ご注意ください。



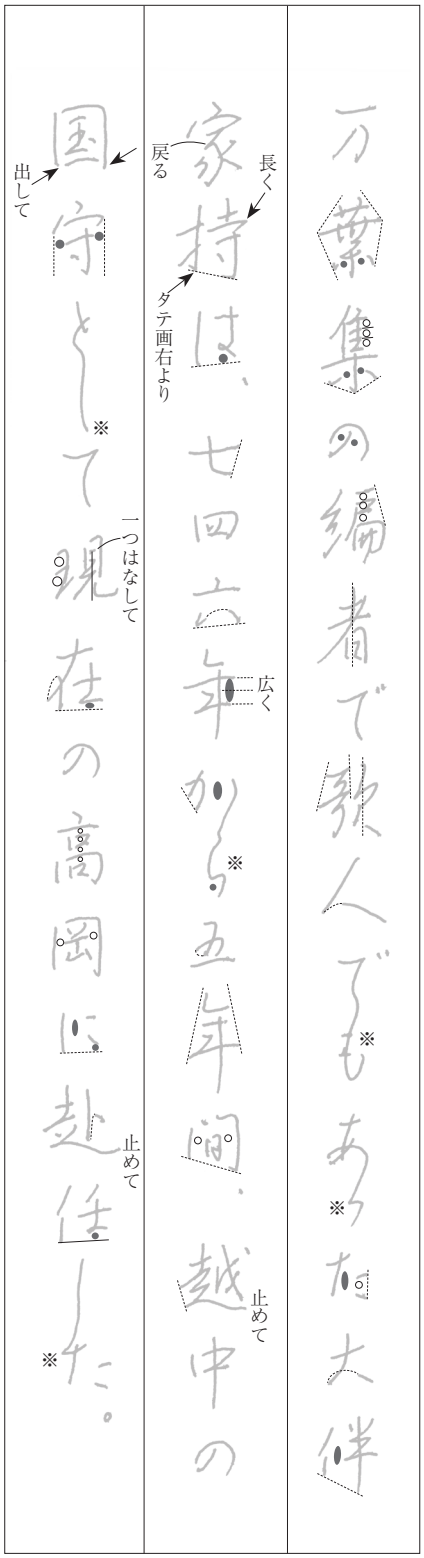
堀津節子先生書

万葉集の編者で歌人でもあった大伴家持は、七四六年から五年間、越中の国守として現在の高岡に赴任した。

〈用具〉 つけペン、万年筆またはデスクペン、ボールペン　インクは黒色（鉛筆は不可）

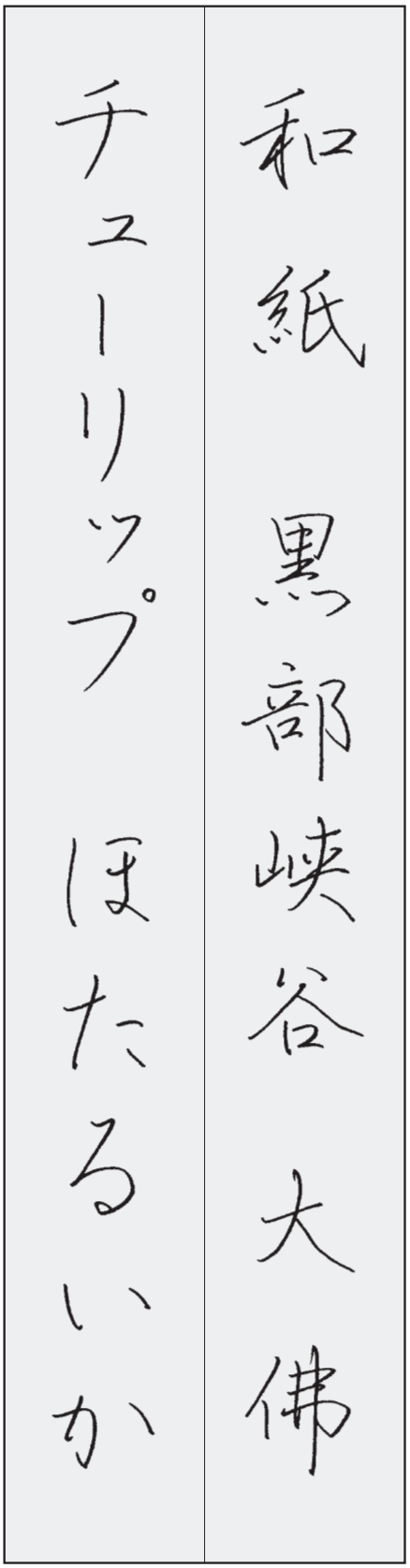
〈用紙〉 不二硬筆用紙3行書き

〈解　説〉



上の文字の収筆から※印まで一文字のように続ける

ペン（1級～10級）課題は段級別です。ご注意ください。



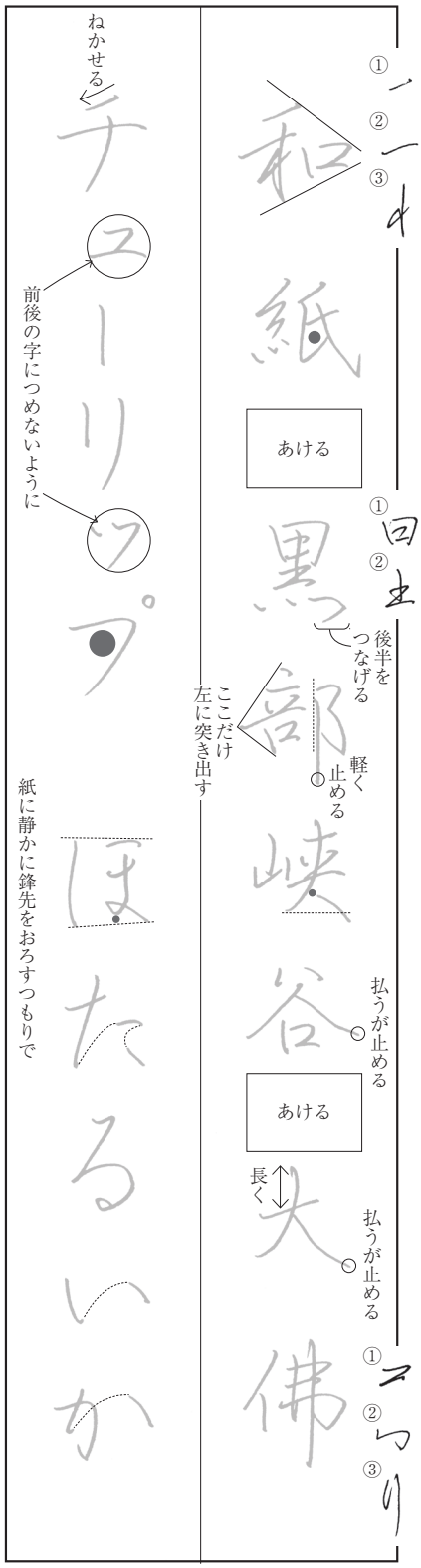
小島鳳洽先生書

和紙　黒部峡谷　大佛
チューリップ　ほたるいか

〈用具〉つけペン、万年筆またはデスクペン、ボールペン　インクは黒色（鉛筆は不可）

〈用紙〉不二硬筆用紙2行書き

〈解　説〉



〝一字書って面白いな〟

―筆遣いと筆字の表現― 運筆の極意に迫る

〝何か、この字への想（オモイ）を込めて書こう〟

（随意課題）
段級に関わりなく出品できます。
評価は天と地になります。

〈平がな一字書〉（参考作品）
そ（この平がなの原字は「曾」の草書形）
（用紙　半紙）

〈漢字一字書〉（参考作品）
曽〈読み〉ソ・ソウ・かつて・すなわち
〈意味〉かさねる・以前に・ふえる
（用紙　半紙）

学生書道展の一字書部門は、近年出品が増加傾向にあります。このページへの取り組み方も始まった当初に比べ、用具・用材、布置、落款の入れ方などに研究の跡が見られるようになってきました。二度と同じ作品を再現することができないのが一字書の醍醐味です。今回は「そ」を課題に選びました。墨色によっても随分印象が変わりますね。同じような作品を何枚も書くのではなく、筆を替えて、墨色を変えて、運筆を変えて、書いてみましょう。

〈用具・用材〉筆＝重ね筆㊦特選永昌　㊥魔法の筆　墨＝松鶴齋寿

○用具を考える。筆の材質、大きさ。用紙の種類（滲みの出し方）。
○墨を磨る。濃いめに磨って、濃墨で表現してみましょう。線の輪郭がピリッとし、渇筆も明るく表現できることでしょう。
○墨を磨りながらお手本を眺めてみよう。この線はどんな筆の動きから生まれるのだろうか。鋒先の浮沈、運筆の遅速変化も見て取りたい。
○書き終えたら、名前の一字を入れる。または押印する。陰影を作っておいて、仮に置いてみて押印の位置を確認するとよい。

石橋鯉城先生書

※作品識別のため、作品下部に教室・氏名の鉛筆書きをしてください。

新 日常の文字を書こう！

ペン字での10分間練習法 ㉑（随意課題）

教室名

氏名

（用紙　原稿用紙20字×10行
用具　ボールペン　つけペン　万年筆　デスクペン）

※どの段級の方でも出品できます。
「月別出品券」及び「バーコード出品券」を添付し出品してください。

富山県

富山市　高岡市　魚津市　氷見市
滑川市　黒部市　砺波市　小矢部市
南砺市　射水市　中新川郡舟橋村
上市町　立山町　下新川郡入善町
朝日町　雨晴海岸　宇奈月温泉
神通川　雲ノ平　宮島峡
立山山麓　黒部峡谷　称名滝
常願寺川　国宝　高岡山瑞龍寺
世界遺産　五箇山菅沼合掌造り集落

20字×10行の原稿用紙に書きます。

まずは10分以内で書けるように練習してみましょう。10分書いても、指や手首が疲れないように書くことが大切です。

課題解説

漢字半紙（誌友～五段）……（3ページ）

五箇山民謡（ごかやまみんよう）

〈課題より〉 五箇山は富山県南西部、庄川沿いの地域。ここは民謡の宝庫と言われ、中でも「こきりこ節」や「麦屋節」が有名。

〈解説〉

○呼吸のリズムをもって、画と画、文字と文字に筆脈をつなげて書こう。

○文字の概形を掴み、単語のまとまりが見えるように書こう。

五…画数が少ないので、空間が広がり過ぎないように、太めの線で小ぶりに書く。

箇…国構は内側を広げるように膨らませて「古」をしっかり入れる。

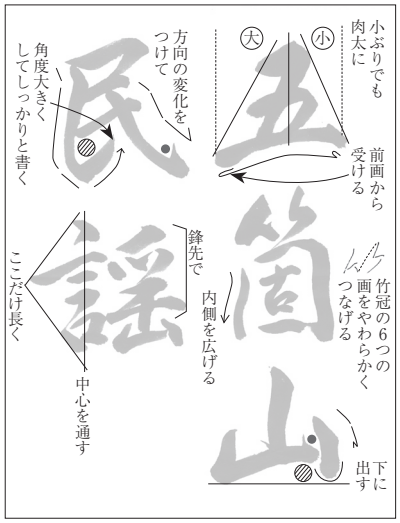
山…太めの線で、一画一画鋒を起こして次画に連絡させる。

民…三画目は撥ねるのではなく「レ」を書くようにしっかり角度を持たせて画を作る。

謡…鋒の浮沈の変化、運筆の遅速の変化をつけて書こう。

〈用具・用材〉

筆＝永昌四号　墨＝油煙和墨　紙＝松雪



漢字半紙（四段～初段）……（4ページ）

大伴家持（おおとものやかもち）

〈課題より〉 家持は天平十八年、宮内少輔（しょうふ＝律令制の省の次官）となる。同年六月には、越中守に任じられ、少納言となって帰京するまでの五年間、越中国に在任した。

〈解説〉

○行書の基本的な書きぶりを学ぶ。

○曲線と直線を交えたメリハリのある行書体を書こう。

大…一画目は低めに、太く短く。二画目は体が先に進み、筆が後からついてくるように。

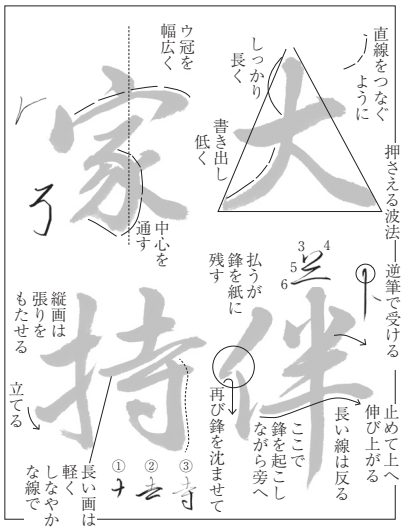
伴…六画目から七画目へは、体を前傾して、逆筆で突いてから体を後ろに倒して書く。体を使って書くことが重要（往還・往って還る）。

家…三画目と六画目の曲線部は直線を連続させるようにして書く。

持…三画目の起筆の角度注意。「寺」の長大画を明確に。

〈用具・用材〉

筆＝永昌四号　墨＝油煙和墨　紙＝松雪



漢字半紙（1級～10級）……（5ページ）

蜃氣楼（しんきろう）

〈課題より〉 蜃は大蛤、またはミズチ。それが吐く息から現れると考えられた。砂漠や海上で、見えない筈の風景が遠くにぼんやりと浮き上がったように見える現象。日射により地表付近の大気に密度差ができ、光が異常屈折するために起こる。

〈解説〉

○三文字を楷書でバランスよく書く。

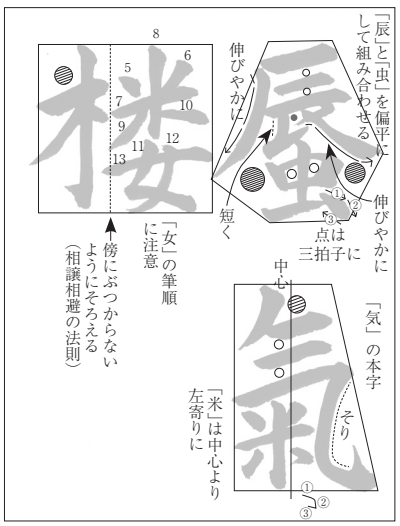
○鋒先の位置を確認しながら、きりっとした書線で表現しよう。

蜃…辰と虫の組合せ。辰の二画目の左払いと最後の右払いを伸びやかにして、その中に虫を収める。辰と虫どちらも扁平にして、縦長になりすぎないように注意。

氣…气（きがまえ）と米の組合せ。「気」の本字。気構えは右に重さがあるので、「米」を左に寄せてバランスを取る。

楼…木偏と娄の組合せ。木偏は幅を狭くして旁をゆったりと。「女」の筆順に注意する。

〈用具・用材〉 筆＝永昌四号　墨＝油煙和墨　紙＝松雪



かな半紙（誌友〜五段）……（6ページ）

解説　福原溪春先生

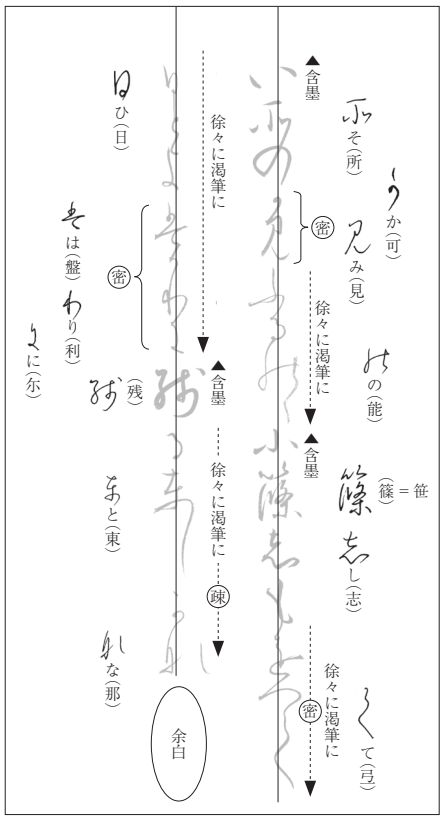
「秀歌之體大略」
石上布留野の小笹霜を経てひと夜ばかりに残る年かな

〈読み〉い所の可見ふる能ゝ小篠志もをへ弓日とよ盤可利尓残る東し可那

〈大意〉石上の布留の野の笹が、幾度もの霜にあって、一節ばかり残っているころになったが、今年も、あと一夜ばかり残っている年であることよ。
※石上の布留…奈良県天理市、石上神宮付近

〈出典〉新古今和歌集　巻第六　冬歌698　摂政太政大臣（藤原良経）

〈解説〉
○行の流れを把握して書こう。
・1行目「い所の可見」の「可」、「ふる能ゝ」の「ゝ」、2行目「日とよ」の「と」、「東し可那」の「し」が中心より右寄りになっている。
○墨色の変化に留意する。
・渇筆部はゆっくり運筆し、残る墨をしぼり出す。
○疎密の変化に留意する。
・1行目の「い所の可見」のか「可見」、「志もをへ弓」の「をへ弓」、2行目の「盤可利尓」が密になっている。
○変体仮名・漢字の草書（くずし方）を理解してから書こう。
・「所・能・弓・盤・東・那」「篠・残」など。
○5ページの「短冊の書式」を理解して全体の構成を考える。



かな半紙（四段〜初段）……（7ページ）

由良のとを わたる舟人 かぢをたえ ゆくへも知らぬ 恋の道かな（曾禰好忠）

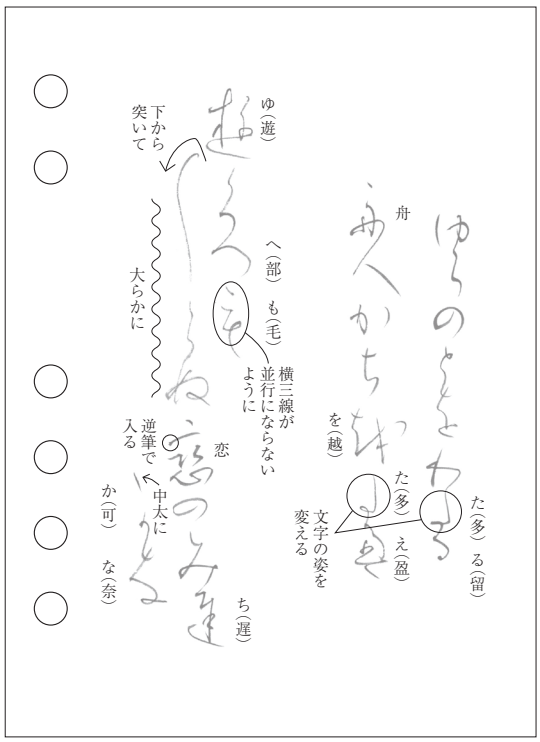
〈読み〉ゆらのとをわ多る舟人かち越多盈遊く部毛しらぬ恋のみ遅可奈

〈大意〉由良の瀬戸を渡る舟のりが、かじを失って、行く先もわからず漂うように、行く末のなりゆきもわからない（たよりない）恋の将来であることよ。

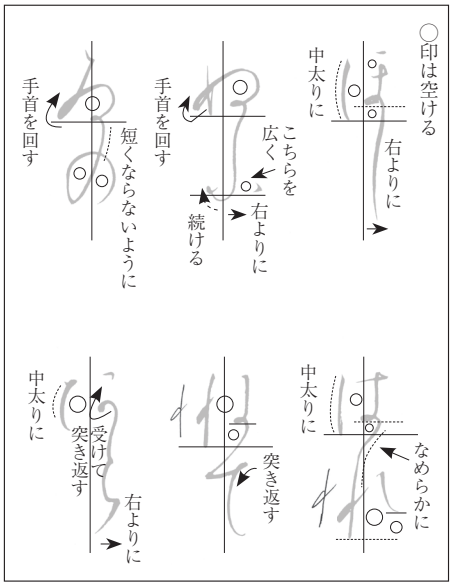
〈出典〉小倉百人一首46

〈解説〉
後半を大らかに運びましょう。
今月は、下の句「しらぬ恋のみち」の上部と下部に添える行を書き、変化をつけました。渇筆部をのびやかにして、軽やかに展開します。
「恋」で含墨しますが、漢字で画数が多いため、墨が多く出て重くならないように、墨量の調整が必要です。

〈用具・用材〉
筆＝かな用小筆　紙＝かな用半紙
墨＝かな用和墨



※左はしには、教室名・氏名を入れます。



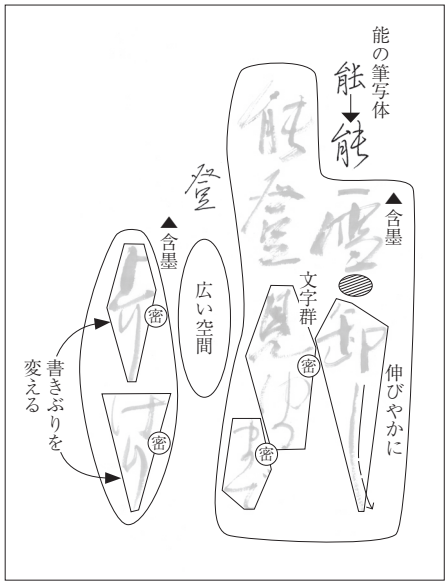
かな半紙（1級～10級）……（8ページ）

ほし　はれ
ぬふ　ねて
ゐの　阿ら

※二字連綿は古典の表現で和歌の基本的な美をつくる大切なものです。繰り返し学習しましょう。

新和様（1級～10級）……（14ページ）

雪卸（おろ）し能登（のと）見ゆるまで上りけり



〈大意〉 久し振りに晴れたので、四・五日降り続いた屋根の雪下ろしをしようと、能登半島が見えるぐらい高い屋根に上った。

〈作者〉 前田普羅（一八八一～一九五四）

〈解説〉
○墨を濃く磨り、少し水で薄めてやや淡墨で書いてみた。墨色の変化を楽しみながら書いてみよう。
○横画は軽快に筆を運び、縦画は筆の重さでゆっくりと運筆する。
○全体を二つのグループで構成するが、それぞれの中にも文字群がある。
○文字の大小、長短、字間のあき具合、潤渇の変化に留意して流れよくまとめたい。

〈用具・用材〉
筆＝超長鋒羊毫筆
墨＝顕微無間　紙＝松雪

◆3月号課題予告

漢字半紙
誌友～五段　尾張徳川家
四段～初段　織田信長
1級～10級　有松絞

かな半紙
誌友～五段　梅可え耳な支てう徒ろふ鶯能者ねしろ多へ尓あ八雪所ふ類
四段～初段　これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふ坂の関（蟬丸）
1級～10級　よろ　らて　そつ　けれ　や那　むき　尓は　こと　末る

扁額
誌友～初段　未定

漢字条幅
1級～10級　米芾　蜀素帖臨書

かな条幅
誌友～10級　火ともせばうら梅がちに見ゆるなり

新和様
八段～初段　及ばざるは過ぎたるより勝れり
1級～10級　未定

ペン
八段～初段　江戸時代までに建造された現存天守十二城の一つ犬山城は、木曽川のほとりの小高い山の上に建てられている。
1級～10級　熱田神宮　大須観音　寂光院　ジブリパーク　しゃちほこ

※課題は変更になることがあります。

昭和二十七年五月二十八日第三種郵便物認可　毎月一回一日発行　定価六〇〇円
令和五年一月二十五日印刷　令和五年二月一日発行　第七十二巻第二号　通巻第八四六号

不二　中高版

不ふ
二じ
中高版

会員番号	
不二教室	
段級	名前
漢字半紙	
かな半紙	
漢字条幅	
かな条幅	
新和様	
ペン	

東京都美術館にて書道學會展と同時開催

第72回 全日本学生書道展

会期 令和5年1月4日（水）～1月10日（火）

◇会　場：東京都美術館　２階第２・３展示室（東京都台東区上野公園 8-36）
◇時　間：午前９時 30 分～午後５時 30 分（入場は午後５時まで）
※最終日は午後２時まで（入場は午後１時 30 分まで）
◇主　催：公益財団法人　日本書道教育学会
◇後　援：文化庁・中国大使館・東京都教育委員会・読売新聞社・日本テレビ放送網株式会社

入場無料

※授賞式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、特別賞受賞者のみを対象に執り行います。

漢字かな交じり書と漢字造型　二つの新しい書美の探究を目指す

公募 第36回 不二現代書展

会　期 令和５年７月４日［火］－９日［日］（予定）

会　場 兵庫県立美術館 ギャラリー（ギャラリー棟３階）
（兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通１丁目１－１）

時　間 午前10時～午後６時
（入館は午後5時30分まで）

出品料 13,000 円（税込）
※ただし部門を跨いで出品の場合は2点目以降1点につき7,000円とする。

【主催】公益財団法人 日本書道教育学会

～日本の伝統文化「書初」にご家族・団体でご出品を！～

令和５年 書初不二誌上展

作品募集

出品期間：令和 5 年 1 月 11 日（水）～1 月 17 日（火）必着

表　彰　特選・金賞・銀賞・銅賞

特選・金賞には賞状及び賞品を、銀賞・銅賞には賞状を贈呈します。
特選に選ばれた作品は
不二各誌・ぺんの力３月号に写真版として掲載されます。
＊出品要項は本誌 50～53 ページをご覧ください。

〈送り先 問合せ先〉
〒101-8358　東京都千代田区西神田2-2-3　電話　03（3234）3956
公益財団法人 日本書道教育学会　書初不二誌上展係　FAX　03（3234）3548

2023 2月号　公益財団法人 日本書道教育学会